



福祉見てある記47

淑徳大学社会福祉研究所発達臨床センター

本研究所研究員 守弘 仁志
(社会情報学)

淑徳大学社会福祉研究所発達臨床センターは千葉県千葉市中央区にあり、東京駅から45分ほど、千葉駅から5分ほどのJR京葉線、内房線、外房線のターミナルである蘇我駅からバスで10分ほどの淑徳大学千葉キャンパス内の正門すぐにある。蘇我駅周辺は千葉や東京方面の交通の便の良さからベッドタウンとなっていて駅の利用者も多い。

今回の訪問では社会福祉研究所所長の松田博雄先生、発達臨床センター長の川眞田喜代子先生、所員の川口真理子先生にお会いしてお話をうかがうことができた。

同研究センターは、昭和40年の淑徳大学の開学と同時に開設された「淑徳大学児童相談所」から昭和47年に「淑徳大学カウンセリングセンター」、52年に「淑徳大学社会福祉研究所相談治療研究室」に改組され、平成4年から「淑徳大学発達臨床研究センター」となった。大学の歴史からも社会福祉の中でも特に児童福祉、しょうがい児の支援に力を入れてきたということだった。



発達臨床センターの入る淑水記念館



観察室の室内



モニタールーム

同研究センターの療育方法は、「発達につまずきを示す乳幼児に対する発達支援活動と研究」を30年以上の長期にわたり実施したなかで、感覚と運動の高次化という組織的な治療教育法「感覚と運動の高次化理論」を開発してこれによって治療教育を実施することが特徴となっている。

「感覚と運動の高次化理論」では感覚入力→感覚運動→知覚運動→パターン知覚→対応知覚→象徴化→概念化1→概念化2という6段階8水準の発達ステージを設けてそれに基づいて詳細な発達診断を行いながら治療教育（集団ならびに個人）を行うという説明を受けた。また、この方法論は3年前に亡くなられた宇佐川浩教授によって完成、拡充された臨床方法、臨床理論であるとの説明を受けた。また同教授が開発した「感覚と運動のチェックリスト」がパソコンプログラム化されて実践的に活用されている。

なお、同センターの現在の活動内容としては、



教具室の室内

1. 障害児の発達臨床活動

臨床方法としては①視覚運動療法と言語・概念療法から成る「個別認知・言語療法」、②集団－音楽療法（聴覚－運動療法）と集団－認知・運動療法から成る「集団療法」、③「個別化された関係療法」によるプログラムの実践が行われている。同センターが大学内にあることでしょうがい児の親子が大学内を通行し、「しょうがい児を見たり接したりすることで総合福祉学部の学生の意識にもよい影響がある。」とのことだった。

2. 大学カリキュラムの臨床実習

研究センターにおいて同大学の総合福祉学部の学科での「障害児初級臨床実習」「障害児上級臨床実習」が履修できる。また、大学院臨床心理学コースの臨床心理実習も行われている。訪問時には実習生の実習風景も少し



はめ板の教具

だけ見学することができた。なお、千葉県内の特別支援学校教諭のうちの多くがこれらの実習を履修した同大学の卒業生で占められているとのことだった。

3. 発達臨床研究セミナーの開催

4. 紀要「発達臨床研究」の刊行

5. 療育教具の開発と研究 …などがある。

最後に見学させてもらったのが同センターで開発した臨床実践で使用する療育教具だった。知覚に関する教具をはじめ多数の教具が広い部屋に整理され収納配置されていた。これらの開発用具の中には商品化を検討しているものもあるとのことだった。



触覚弁別、色弁別教具の収納



絵や写真などの教具

平成25年2月27日訪問
 淑徳大学社会福祉研究所発達臨床センター
 （千葉市大巖寺町200 淑徳大学千葉キャンパス）